小田原市の旧内野醤油店における明治36年竣工の店蔵について

ON THE *MISEGURA* OF THE UCHINO SOY SHOP, BUILT IN 1903 IN ODAWARA CITY

田中和幸 ——— * 1

キーワード:

近代和風建築, 店蔵, 普請帳, 工法, 大工棟梁, 小田原市

Keywords:

Modern traditional Japanese architecture, *Misegura*, *Fushincho*, Construction method, Carpenter, Odawara City

Kazuyuki TANAKA ——— * 1

This paper introduces the *misegura*, a Japanese traditional façade, of the former Uchino Soy Sauce Shop, built in 1903 in Odawara City. The store was constructed by Unosuke Suzuki, a local carpenter. The *shinchikuihi-shiharaicho* (construction record) has been kept by the Uchino family since the shop's construction. Drawing on fieldwork and close study of the *shinchikuihi-shiharaicho*, this paper explores the characteristics of this *misegura*. It explains that the *misegura*, although covered in corrugated iron sheets and ridge tiles features a plaster based created with wooden laths. These construction methods effectively shortened construction time and reduced the weight of the building.

1. はじめに

内野家は旧東海道に面する小田原市板橋(旧足柄下郡大窪村)に位置し、この地で醤油の醸造を営んできた名家である。既に廃業してはいるものの、敷地内には明治36年竣工の店蔵の他に醸造施設等の建物が現存しており往時の姿を良く留めている¹⁾。現在は四代目御当主である内野洋一郎氏によって建物が定期的に公開されている(写真1)。

写真1 旧内野醤油店全景(左より新座敷、店蔵、袖蔵)

旧内野醤油店の店蔵は関東型土蔵造としながらも、ナマコ壁に銅板張り、石造風アーチを備えた特異な意匠であると羽生は報告している²⁾。また平井は内野家所蔵の普請帳である『新築費支払帳(以下、支払帳とする)』に触れ、建築資材の価格や職人の賃金を現在の価値と比較しながら、4490円を費やし明治36年11月に店蔵が竣工したと記している³⁾。

ただ、建物調査については時間的な制約から簡易的で、『支払帳』についても概要紹介に留まっている。筆者は平成24年から建物の詳細調査と、『支払帳』の内容を分析し報告を行ってきた⁴⁾。本稿では両者を相互的に分析することで、旧内野醤油店の店蔵で用いられた特徴的な建築工法について報告する。

2. 『支払帳』の記載内容

初代御当主の内野種三郎(以下、種三郎とする)⁵⁾氏が店蔵を建設する際に記した『支払帳』は縦24cm×横18cmの右綴じで、表紙には「明治参拾五年 新築費支払帳 寅十月日」と筆書きされ、35丁の和紙が二つ折されしっかりと綴じられている(図1)。

『支払帳』には17項目の見出しがあり⁶⁾、建築資材や賃金等の「支払」と親類や近隣住民等からの御祝品を記した「見舞」に大別される。そして「支払」については「材料費」と「労務費」ならびに内野家主催の祝宴等に充てた「建築儀礼費」に分けられ、各見出しを3種類の費用に分類した(図2)。

なお見出しの「諸勘定支払之部」は支払概要と金額を時系列順に記したものである。さらに「菊烟土管屋」は左官材料やセメントの

図1 『支払帳』の記載内容

図2 『支払帳』の内訳(番号は掲載順を示す)

本稿は2012年3月『日本建築学会関東支部研究報告集』「小田原市板橋の内野家に関する研究～『明治参拾五年新築費支払帳』の分析～」と「小田原市板橋の内野家に関する研究～工事工程から見る主屋の構法的特徴～」に新たな知見を加え大幅な加筆・修正を行ったものである。

¹⁾ 田中建築研究所一級建築士事務所 代表・博士(工学)
(〒135-0015 江東区千石3-5-10-301)

¹⁾ Tanaka Research Institute, Dr. Eng.

二次製品を取り扱う商店、「鍋職勘定ノ部」は板金工、「柵物職勘定ノ部」は木挽き、「地目用勘定ノ部」は土工に該当することが記載内容から判断できた。

次に『支払帳』の誤字脱字や計算ミス等による修正を行ったところ、建築総工事は記載されていた合計金額よりも92円69銭4厘多い、4583円34銭6厘となった。その内訳は「材料費」が2507円44銭、「労務費」が1834円11銭1厘、「建築儀礼費」が175円9銭5厘であった。そして分類が不可能な66円70銭は「不明」とし、各割合を図に示した（図3）。

ちなみに明治27年に最初の建築資材を購入しているが「諸勘定支払之部」には「自明治廿七年 至明治廿五年九月 諸材木代支払高」と記載されていることから『支払帳』への記入を開始したのは明治35年9月からであったと言える。なお本工事は実費精算方式による。

図3 支払金額の割合

3. 建築職人の出面と単価について

「労務費」に分類した8項目を「大工」「鳶工」「石工」「左官工」「板金工」「木挽」「土工」の7職種に分け、それぞれの出面と支払累計金額を月毎に算出し図に示した（図4）。

図4 月毎における各建築職人の出面と支払累計金額(出来高)

明治35年12月には2人の「木挽」が計上されているが、年明けの1月には人工の計上がない為、現場での本格的な作業は明治36年2月からであった。2月の出面は「大工」が200人、「木挽」が57人と両職種で9割を超えていることから、この月は木材の加工を主体としていたと分かる。

明治36年3月には「大工」の出面が326人に増加し、2月には僅かな出面であった「鳶工」が130人となっている。その一方で「木挽」は前月の半分以下となっている。3月14日の建前⁷⁾を境に、木材の加工から「大工」による建て方へと移行し、併せて「鳶工」による足場組みが行われた。

明治36年4月と5月も「大工」は300人を超える職人が計上されており、一日平均10人以上の「大工」が現場で作業していたことに

なる。また「石工」は3月と4月に一ヶ月で100人を超える職人によって工事が進められていたが、5月には20人に減少していることから、その上旬には石積みの作業がほぼ終了していたと思われる。

「石工」の出面が減少するのに伴い、「左官工」の出面が増加している。明治36年4月には58人であったが、5月から7月にかけては一ヶ月の平均が150人を超えている。また3月と4月の「板金工」は僅かであったが、5月から7月にかけては一ヶ月平均45人の「板金工」が従事していた。この期間は外部足場での作業を主とした「板金工」と「左官工」が現場で作業を進めていたことになる。

『支払帳』の出面は8月13日の「鳶工」で帳簿を締めていることから、この時までには足場が解体されていたことになる。従って、足場を必要とする「石工」と「左官工」ならびに「板金工」は、それより前に作業を終了させていた。なお8月の支払い金額は総工事費の94%に達していたことから、この時には旧内野醤油店の店蔵がほぼ完成し全容を現していたものと言える。

次に、店蔵の建設に携わった建築職人の「出面」と「支払金額」を合計⁸⁾し「職人単価」を算出した（表1）。

表1 旧内野醤油店の店蔵の建設に従事した建築職人の単価

	大工	鳶工	石工	左官工	板金工	木挽	土工
合計	1250人	220人	243人	547人	163人	87人	212人
出面支払金額	¥829.745	¥122.677	¥171.676	¥359.643	¥122.660	¥53.700	¥99.110
職人単価	¥0.660	¥0.560	¥0.710	¥0.660	¥0.750	¥0.620	¥0.470
小田原町職人単価	¥0.650	¥0.560	¥0.700	¥0.650	未記入	¥0.800	¥0.450

「職人単価」と『明治小田原町誌』⁹⁾に掲載された明治34年の「小田原町職人単価」を比較したところ、旧内野醤油店の店蔵に従事していた「木挽」は18銭も安かった。それは、ここでの木挽きが山へ入り作業する環境ではなく、現場に持ち込まれた丸太を製材する形態であったことによる。

その反面、店蔵の建設に従事した建築職人のうち一番高い賃金は「板金工」である。『明治小田原町誌』には「板金工」の記載が無い¹⁰⁾ことから、当時の小田原では金属板を利用した建物が少なく、職人も僅かであった為に賃金が高かった可能性を指摘できる。従って旧内野醤油店の店蔵は当時の小田原で外部に金属板が適用された珍しい事例であったと推察される。また『支払帳』には瓦葺き職人の記載が無いことから、屋根は瓦を主体としたものでは無く金属板を適用したものであったと言える¹¹⁾。

4. 購入材料を踏まえた工事工程

前述した職人の出面をもとに示した工事の流れに、建築資材の購入時期を踏まえて工事工程を作成した(表2)。

明治27年にはじめて「古ケヤキ」を購入した後、松丸太や樺の板材等を少しずつ買い揃えてはいたが、明治35年9月27日に製材された材木を一括で大量購入している。このことから、店蔵を新築する計画は早い段階からあったものの、建物形状が決定したのは明治35年8月頃の可能性が高い。そして本格的な材木の加工が明治36年2月から行われ、3月14日の建前に向けて準備が進められた。

店蔵に用いた建築材料のうち、木材を除いた最初の購入材料は明治35年12月に地元で産出された竈石である。この石は翌年の2月

[illegible]

購入資材を踏まえて作成した工事工程から、従来の土蔵造りでは左官工による壁塗りの作業だけでも 1 年程度の期間を要する¹⁵⁾が、旧内野醤油店の店蔵では約 3 ヶ月半と短い工期で作業していたことが明らかとなった。

軽量化については屋根の平場部分に使用されている金属板も大きく影響している(写真 3)。全面瓦葺きであった竣工時の店蔵を、関東大震災後に金属板へ改変された可能性が指摘されている¹⁸⁾ものの、『支払帳』に記された波板亜鉛引鉄板の購入数量より L 字形の屋根面を葺くことができる¹⁹⁾。さらに前述した瓦葺き職人の記述がないことを踏まえると、明治 36 年の竣工時より波板亜鉛引鉄板であっ

1281

た可能性が高い。

関東大震災によって旧内野醤油店の近くに位置する山縣有朋別邸をはじめ、御用邸や閑院宮邸等が倒壊している²⁰⁾。また多くの土蔵が震災で被害を受けた²¹⁾が、旧内野醤油店の店蔵は軽量化されたことで被害を軽減できた可能性がある。

その一方で、重量のある建築資材が店蔵で使用されている。それは店蔵の防火壁と出入口に設けられたアーチに使用されている石材である。前者は隣接する久野村の佐川喜三郎等から、後者は仙次郎から購入したことが『支払帳』に記載されている²²⁾。

また軽量化された屋根の棟には瓦が使用されている。『支払帳』に記された清水瓦の購入数量から、現状の寄棟造の棟を葺くことが可能である²³⁾。ちなみに現在の下屋は瓦棒鉄板葺きだが、『支払帳』から当初は棧瓦葺きで、アーチを覆う下屋については両袖瓦と平瓦を交互に用いたものであったことが読み取れる。

さらに 2 階の壁面でも銅板を使用して軽量化が図られつつも、2 階の一部にはナマコ壁が用いられている。下地の堅瓦は屋根瓦と同じ場所で生産されたもので、購入数量から現在覆われている壁面を満たすことができる²⁴⁾。

このうち、石材の防火壁については下部に石積みを残して上部は鉄網コンクリートに改変されている。また出入口のアーチは、表裏の目地が一致せず再加工して積み直した痕跡が確認できた。これらは現地調査の結果、関東大震災で倒壊し改修されたことが明らかとなった。これを受け、石積み箇所と同様に重量のある瓦とナマコ壁の仕上げ材でも、地震によって被害を受けた可能性が推察される。

店蔵は建物の軽量化が図られ地震に対して有効に作用した一方で、脆弱性が指摘されていた石材等が部分的に使用されており、一つの建物で矛盾する工法が採用されていた。

6. 近代建築技術史における店蔵の位置づけ

旧内野醤油店の店蔵では構造的な問題を含んでいたにせよ、様々な工法を採用した結果、多彩なデザインがなされたと言える。

そこには伝統的な木造の手法も含まれていた。店蔵では 1 階に引違いのガラス戸と堅格子がはめ込まれ、両袖にはナマコ壁の戸袋が設けられているが、これらは後補のもので、かつては揚戸に防火戸が納まっていた。また、この室内側は座敷になっているが当初は土間であったことが大黒柱等の痕跡から確認できた。1 階は活用して行く為に階段の位置を変更する等、後世の手が加えられているが竣工時は道路に面して開放された一般的な店蔵の形式を採っていた。2 階の座敷は、鳳凰の透かし彫りが施された欄間に桑や花梨等の銘木と壁紙等を貼り込んだ床の間周りは竣工時の数寄屋の意匠を良く残している。

このように店蔵は和風と洋風の工法が多用された珍しい建物であると言える。意匠面については種三郎氏の強い思いがあった可能性を指摘されてはいる²⁵⁾ものの、店蔵の構造的な部分については大工棟梁であった鈴木卯之助の意向が大きく影響したと考えられる。ところが、彼は地元に住む町場の大工であったことは確認されているが²⁶⁾、どこで建築技術を修得しどのような作品を残したのかは不明である。

今後の調査によって彼の経歴等が解明されることを期待するが、小舞下地に土壁を塗り籠めた伝統的な日本の店蔵が、明治 30 年代に

は出桁と軒蛇腹の意匠を残しながらも、木摺り下地に漆喰を塗る工法に替わったことで建物を軽量化させ、店蔵の耐震性が向上したと言える。また関東大震災後に流行した銅板張りの外壁を明治 36 年の時点で大胆にも店蔵の壁面に使用していた。

旧内野醤油店の店蔵は竣工から 111 年が経過しているにも関わらず堅固な地盤の上で沈下せず、定期的なメンテナンスが行われてきたことによって大規模な修理をすることなく往時の姿を保ち続けている。この店蔵は小田原において関東大震災以前に竣工した数少ない貴重な歴史的建造物であることに加え、近代建築に用いられた工法が随所に盛り込まれた、晩年の店蔵と位置づけられよう。

謝辞

本稿作成にあたり内野洋一郎氏をはじめ、現地調査や『支払帳』の解説を通して伊藤香織氏、泉原栄三氏らの御協力を頂きました。また東海大学の羽生修二名誉教授ならびに神奈川大学の内田青蔵教授には多くの助言を賜りました。併せて謝意を申し上げます。

注

- 1) 醤油醸造の創業と廃業については、青木良一『『武功醤油』の頃—故内野悦郎さんに聞く』(『小田原市郷土文化館研究報告』pp. 33-34、2013. 3) に詳しい。
- 2) 神奈川県教育委員会生涯学習部文化財課『神奈川県近代和風建築 神奈川県近代和風建築調査報告書』同発行、pp. 89-92、2000. 3。
- 3) 平井泰延「小田原市板橋の醤油屋内野家」『西さがみ庶民史録』、pp. 40-43、1990. 6。
- 4) 拙稿「小田原市板橋の内野家に関する研究～『明治参拾五年新築費支払帳』の分析～」『日本建築学会関東支部研究報告集』pp. 585-588、2013. 3 と拙稿「小田原市板橋の内野家に関する研究～工事工程から見る主屋の構法的特徴～」『日本建築学会関東支部研究報告集』pp. 589-602、2013. 3 ならびに拙稿「小田原市板橋の内野邸実測調査報告」『小田原市郷土文化館研究報告』pp. 9-31、2013. 3 がある。なお本稿作成に伴う建物調査は解体を伴っていない為に目視を基本としている。
- 5) 種三郎氏は安政 5 年生まれ。醤油の醸造と販売に加え、大窪村の村長(大窪村役場『大窪村勢要覧』1936)や小田原通商銀行の頭取(内田哲夫、岩崎宗純『小田原地方商工業史』夢工房、1989. 8)を務めていた。ちなみに種三郎氏は分家筋にあたる。
- 6) 『支払帳』には竣工当時の建物形状を記した図面等はなく、また写真等の所蔵についてもこれまでのところ確認されていない。なお購入部材から読み取れる建物は店蔵以外にも含まれているが、正確な規模等については不明である。
- 7) 『支払帳』による。購入した折箱の数量より参加人数は 80 名程度であったと思われる。
- 8) 表具師への支払金額は 48 円 90 銭、職人等への謝金の支払金額は 26 円であった。
- 9) 小田原市立図書館『明治小田原町誌』同発行、1975。
- 10) 前掲注 9)。明治 28 年から明治 34 年における「板金工」の賃金は記入されていない。
- 11) 部分的な瓦葺きには「土工」によって作業されたことが『支払帳』から読み取れる。
- 12) 『支払帳』には「生子板」と記されている。購入先は日本橋区小伝馬町 2

- 丁目 8 番地の「中嶋屋」であった。
- 13) 銅板の購入先は日本橋区小伝馬町 2 丁目 16 番地の「中島屋」であった。
銅板の代金は明治 36 年 2 月に支払っている為に早い段階で現場へ納品されていたことが分かる。
- 14) 『支払帳』には「生婦や塗りノ代」と記されている。
- 15) 旧内野醤油店の店蔵と同規模で、東京都府中市にあった明治 21 年竣工の店蔵の島田家（府中市郷土の森『旧島田家住宅(店蔵)移築修理工事報告書』府中市教育委員会、1989）では、明治 20 年 5 月から明治 21 年 7 月まで左官工の出面がコンスタントに計上されており、壁塗りの作業が 14 カ月間に及んでいたことが記録から読み取れる。
- 16) 木摺は西村保太郎から 2 回に分けて、長さ 2 間の幅四分一厘が 250 丁と幅六分三厘を 240 丁購入している。床下と小屋裏から目視により木摺の使用状況を確認した。
- 17) 『支払帳』には「銅板貳百枚 十五貫目」と記されており、定尺(1.2m×0.365m)を使用した場合の合計面積は 87.6 m²になる。2 階正面の開口部回りと防火戸が建て込まれていた。2 階側面と背面の合計面積は 32.2 m²である為、はぜを含めても購入数量で壁面を満たすことができる。なお側面と背面の防火戸は現存していない為、痕跡から判断した。
- 18) 平成 24 年 11 月 5 日に実施した、内野洋一郎氏からの聞き取りによる。
- 19) 『支払帳』には「生子板八尺四拾枚」と「全七尺五拾枚」と記されており、定尺(2.5 尺/0.762m)幅を使用した場合の合計面積は 154.7 m²になる。現状の屋根面積は 101.6 m²である為、重なり部分を含めても購入数量で屋根面を満たすことができる。なお『支払帳』には屋根葺き材料として使用することができる瓦と銅板の購入数量では屋根面を満たすことは出来ず、さらに新築に伴う「見舞」にも屋根葺き材となる茅等の項目が記述されていないことから、「生子板」を屋根の平場へ使用した可能性が高いと考えられる。
- 20) 古稀庵記録保存調査団『山縣有朋旧邸小田原古稀庵調査報告書』千代田火災海上保険株式会社、1982. 2。
- 21) 関東大震災による「土蔵」の被害状況について尾崎久助（『建築雑誌 臨時増刊』、建築学会、p. 5、1924. 6）は、東京市内で震害のみによる被災件数を、全壊 27 棟、半潰 27 棟、大破損 194 棟とし、合計 248 棟であったことを報告している。
- 22) 店蔵の妻面に防火壁を設けた場合の体積は 14.5 m³で、購入した 802.286 切(22.303 m³)の石材で満たすことができる。アーチについては「門セリ持用六切」と記されている。
- 23) 瓦の製造元は静岡県安倍郡有度村沼川の渡辺金左衛門で、L 字型の大棟には「丸雁五拾枚」で、その長さは 12.5m(はたらき 25 cm)で現状の 10.2m を覆うことができる。隅棟については「□丸百八十八枚」で 47m(はたらき 25 cm)となり、現状の 17.75m を満たすことができる。また、揚戸部分の下屋には「棧瓦貳百五拾枚」と「唐草三拾貳枚」が、アーチ部分の下屋には「本平瓦貳拾枚」と「両袖廿八枚」が葺かれていたことが『支払帳』から読み取れる。
- 24) 屋根瓦と同じ製造元で、ナマコ壁の下地となる瓦は「建瓦（原文ママ）貳百五拾枚」と記されている。
- 25) 前掲注 3)。店蔵で適用された様々な仕様については、種三郎氏が東京へ行った際に見たものを参考にした可能性を指摘している。
- 26) 前掲注 3)。小田原市板橋 666 番地にある鈴木工務店主の鈴木和久氏の曾祖父であったことは確認されている。

[2015 年 2 月 17 日原稿受理 2015 年 5 月 7 日採用決定]